

兩人御中御書

弘安二年一〇月二〇日 五八歳

大国阿闍梨・^{衛門}大^{大夫}殿等に申す。故大進阿闍梨の坊は各々の御計らひに
有るべきかと存じ候に、今に人も住せずなど候なるはいかなる事ぞ。ゆづり状のなく
ばこそ人々も計らひ候はめ。くはしくうけ給はり候へば、^弁の阿闍梨にゆづられて候
よしうけ給はり候ひき。又いぎあるべしともをばへず候。それに御用みなきは別の子細
の候か。其の子細なくば大国阿闍梨・大夫殿の御計らひとして^弁阿闍梨の坊へこぼちわ
たさせ給ひ候へ。心げんなる人に候へば、いかながとこそをもひ候らめ。^弁の阿闍梨の
坊を^{修理}して、^{広漏}ひろくもらずば、諸人の御ために御^宝たからにてこそ候はんずらむめ。ふゆ
は^{焼亡}せうもうしげし。もしやけなば^{焼損}そむと申し、人も^笑わらいなん。このふみついて^書両三日
が内に^{ことき}事切つて、各々の御返事給ひ候はん。恐々謹言。

十月廿日

日 蓮 花 押

兩人御中

^讀ゆづり状をたがうべからず。